

フリースと心理主義(二)

速川治郎

(一)

心理主義は当然心理学に関係する。ところで、この心理学も時の流れと共に変化して来た。従って心理学に対する古臭い非難も哲学史の変遷につれてなくなつて来たのである。このことを確認するのは重要であろう。R・アイスラーは自著『認識論入門』(一九〇七年)の中で次のように言う。すなわち「ある物事を論理的に分析したり、それを批判しながら確定した後で、認識の究極の源泉を求めるのは当然である。その源泉は認識する主観の性質、機能の中で知覚されるのであるから、心理学的機能が認識にかかわることを全く無視するわけにはいかない。だからカントからコーエン、フッサールに至るまで、反心理主義者は存在しないと書いてよい。このことから言えば、誰が心理主義者であり、誰がそうでないかという区別はできない。いや心理主義、反心理主義という二つの方向、方法の境界がいまいで、ぼやけていると言つた方がよいかも知れない。ある思想が心理学的事実、法則性を持つから、

それが心理主義と言われるのではなくて、認識批判の方法、目的を心理学の手續き、観点と同一視してしまふこと、また心理学に何でも引き寄せて考へること、これらのことが心理主義という非難となるのである。」こうアイストラは述べる。W・モークは自著『論理学、心理学、心理主義——学の体系的研究』（一九一九年）の中で次のように述べる。「心理主義という語は一義的な意味では用いられない。が一般にこの概念によって示そうとしているものは、心理学的考へ方を他の学問領域の中へ理由もなく入れてしまふ研究方向である。こうして自然科学、数学、倫理学、美学の中で心理主義が語られ得る。特に認識論、論理学の領域内では思考の基礎付け、原理を問う場合に、思考は心理学的関心と心理学的問題提起と結び付く。しかし心理主義は認識論、論理学の領域では他の学に対して取ったのとは全く異なつた方法で表現され得る。心理学内の問題提起しか行わないその心理学が論理学、認識論全領域を心理学のものだと見なすならば、これは極端な心理主義である。この場合、心理学は論理学的・認識論的方法を心理学より下位のもの、あるいは心理学と同列のものとし、その方法の背後で隠然たる力を持ち、論理学的、認識論的な問題提起、問題解決の場合に潜む特性に心理学が影響を及ぼすと見なすのである。この種の心理主義は、この主義と同義である概念か、あるいは対立した概念を通して更に一層詳しく規定できるのである。そこで、まず言へることは、心理主義という概念は、経験主義、人間学主義、主観主義、相対主義等という概念と関連するが、アプリアリズム、論理主義、合理主義等という概念には対立しているということである。前者の概念との関係、あるいは後者の概念との関係の内のどちらか一方を強調することによって心理主義のニュアンスが違って来る。心理主義という語の多くの意味の中で明白に現れた事柄がある。それは、全く異なつた、しかも鋭く対立したいくつかの学説に心理主義の名称がかぶせられたということ、そればかりか心理学的考へ方に反対する理論の中に

さえ、心理主義の色を見出そうとしたということ、この二つである。」

後にH・ブアイルは、自著『イギリス経験主義における心理主義』(一九三四年)の中で、心理主義を対象論的、科学理論的、法則論的、方法論的、認識論的のものに分けた。この際、彼は心理主義とは心理学的なもの以外のものを心理学的なものに変えたものであると規定したり、また心理学以外の問題を心理学的手段で解決しようとする試みであるとも言った。

(二)

そこで今日では心理主義を次のように区別することができるであろう。

一、最も一般的な意味での心理主義は、哲学的問題を説明できる潜在能力を心理学の領域のものとしている形而上学的立場を示し、哲学を心理学へ還元する立場であるとも言える。この場合すべてのものは明白に心理学の概念に依存している。

二、これに対して個人の考える心理主義、つまりJ・S・ミル、T・リップス、C・ジークヴァルト、B・エルトマンという人名と結び付く心理主義、フッサールの有名な批判を引き起こした心理主義がある。

三、心理学が主としてその方法から言って他の学から独立した学であると見なされた場合、そこから生じる心理主義は心理学的方法だけを哲学における認識方法としてしまう。

四、心理学はその独自の対象領域を持つ故に他の学とは異なると見なされた場合、そこから生じる心理主義は哲

学を心理学の対象領域内の論述に還元してしまふ。

フリースの立場は一〇四の心理主義の意味を持っていない。その理由は次の通りである。一、彼の哲学概念は彼の心理学概念よりも広い。二、一九世紀初頭の哲学を彼は問題にしている。三、彼は心理学的方法を多様な方法論の一部と見なしている。四、彼は心理学の対象領域を哲学の領域の一部と見なしている。

心理主義が非難される理由は何であるか。個別科学（ここでは特に心理学）へ、ある学（ここでは哲学）を還元するということは、その時の個別科学の成果を研究しているある学と結び付けることである。個別科学が著しく進歩している時には、特にそういうことが起こり勝ちであるが、そうなった場合、その学は逆に不確実なものであり、追い抜かされ得るものになってしまう。それと言うのも今日の多くの真理が明日の間違ひとなり、昨日の多くの真理が今日の間違ひになるからである。ここに心理主義が非難される根拠がある。

(三)

さて以上の観点からフリースに関して次のことが言えるであらう。

一、フリースは経験心理学的研究方法とア・プリオリな意識構造、ア・プリオリな理性構造とを区別しなかったということから、しばしば非難されるが、しかし、そのような意味の心理主義者ではない。それもそのはず彼はライプニッツ主義者でもあるからである。彼はロックの考え、通俗哲学的、啓蒙主義的考えに対立して「意識それ自体」(intellectus ipse)を前以って与えられたもの、つまりア・プリオリなものとは主張したのである。

二、フリースは経験心理学的方法と超越論的方法を区別しなかつたといふことで非難されたが、そのように区別しなかつた心理主義者ではない。彼が非難されるとすれば、それは彼が非心理学的、非人間学的方法にふさわしい専門用語を考えなかつたこと位である。彼は超越論的方法を非心理学的、非人間学的方法と呼ばなかつた。なぜならば彼にとってカントの超越論的方法は心理学的方法と非心理学的方法を混合させたものだからである。またフリースにとって演繹と思弁は区別できるものではなかつた。というのは、彼から見れば両者に経験的モメントとア・プリオリなモメントが入り交じっているからである。このことから一般に形而上学的方法は容易に語られ得るが、しかし、このことは誤解される可能性も多い。フリースはどうであろうか。彼の叙述の中には経験的方法に形而上学的、ア・プリオリな基礎、意味が明らかにあるのである。

三、彼はカントの意味で理解された超越論的觀念論の影響を受けながらも、哲学を意識の構成能力、偶然的であり、経験に依存する構成能力の一部としてしまう心理主義者ではない。フリースにとって意識は既に或るものについての意識であり、この或るものは前以つて与えられたものである。それが意識そのものであるべきであるにして

も。
前述の中にある三つのタイプの心理主義者にフリースは当てはまらないのであるが、次の問いが出て来る。すなわち今日の形而上学的反省、イデオロギー批判的な反省というような制約を持ち出すならば、フリースの中にも心理主義概念は展開され得るのではないかという問いである。その概念は展開され得る。ただし、それは還元主義的心理主義概念ではなく、拡大心理主義概念である。ア・プリオリなものを個別科学の研究によってのみ獲得することを形而上学的働きが可能にするというテーゼをフリースは示した。彼にとって心理学はそれを補佐するものであ

る。

拡大心理主義概念によれば、ドイツ観念論全体と、デカルト、ライブニッツ、ロックの影響を受けた近代哲学全体とを心理主義であるとせざるを得ないであろう。なぜならば、それらは精神、意識、能力を重要な対象とするからである。すなわち、先述の観念論、近代哲学は世界を解明する基準を持つと考へ、この基準を説明する潜在能力として精神、意識、能力を取り上げるからである。十九世紀において、哲学が自律性を得ようと努力したのは、個別科学を哲学の代用にすべきであるとか、哲学を個別科学によって乗り越えるべきであるという要求に反発したからである。が、その要求はいろいろな科学、哲学の中にある知の根本的関連、廢棄不可能な関連を見逃すことになりかねない。とにかくデカルト、ライブニッツ、カント、フイヒテ、ヘーゲルを心理主義者と呼ぶというのであれば、フリースも心理主義者であると言えよう。だが、これではフリースに対する非難にはならない。

(四)

フリースの主張はどのようなものであるかを述べてみよう。

一、フリースは実然的認識と確然的認識との区別を歴史的認識と数理哲学的認識との区別と同一視した。が彼によると特称判断は全称判断を基礎付けることができないのである。「われわれ人間は、時間、空間内にある個々の物の状態、性質を感覺的に知覚していない時には、それらの状態、性質が分からない。このことは火を見るより明らかである。しかし、ある種類のすべての物、例えば、すべての恒星、すべての花を感覺直観が理解するか、ま

とめるといふことはできない。そのへすべて」といふことをわれわれは考えることができるだけである。これと同じことが数学上の真理、人倫上の真理、両者の必然性についても言える。普遍的、必然的形式を帯びた思想は、感覺直観によるだけでは、われわれの精神の中へ全く入らないのであって、純粹理性そのものの形式によって規定されているのである。」(フリース全集、G・ケーニヒ、L・ゲルトゼツァー編、二三卷、『数学的自然哲学、哲学的方法による論及』一八二二年、一〇九頁) フリースは以上の点で、まさに完全なカント派哲学者であり、そして法則の認識を感性と悟性、ないし純粹理性との産物とみなしたのである。「このようにして実然的認識と確然的認識の區別がなされ、前者は個別者の現実態を、後者は普遍的真理、必然的真理を認識させる。そこで、われわれはその區別にまず注目する。この區別が所与の自然を、認識する理性に經驗を通してはっきり分らせるからである。それもそのはず実然的認識がすべて感覺に起因するのに対して、確然的認識、すなわち数学的、および哲学的認識は決して感覺には起因し得ないからである。」(前掲書、一〇八頁および次頁)

二、フリースは哲学の基盤である根本学としての心理的人間学について確かに繰り返し語っている。そこで哲学は(存在論的に)その人間学に従属しているという意味を持ち、このことから哲学を心理学から(論理的に)引き出せると言えるかも知れない。だが、このことはフリースの学説には当てはまらない。というのはフリースが心理主義者と見なされる恐れのない数学の領域に注目すれば明瞭トウモロコシになるからである。フリースは自著『数学的自然哲学』の中で次のように言っている。すなわち「数学における学説方法は常に定理応用型のもの (dogmatische Lehrmethode) であるが、しかし、この基礎には、大抵、諸理論創造のための思弁的、批判的方法を研究することがある。」(フリース全集、一三卷、三九頁) このことは認識論的、建築的思考であり、存在論的思考ではない。すなわ

ち認識された様々なものを単に寄せ集めるのではなく、学的体系へと統一して行くことが重要であり、既に或る学に従属して、それに安住している考えがあるのではない。先述の「思弁的、批判的方法を研究すること」は *potestatem* *propos* *juvas* (われわれにとって先なるもの) と *potestatem* *in* *phases* (本性上先なるもの) というアリストテレスの区別から検討できる。われわれにとって先なるものの謂は感覚によって認識できるものであるから、それ自体経験的なもの、後のものである。これに対して、本性上先なるもの、つまり基礎になるものは発見的方法から見れば超経験的なもの、先行するものである。フリースは自分の問題にする発見的方法に対する証明ができると考えるが、このことは別にして彼は発見的機能をしばしば強調した。

三、フリースは、カントの『純粹理性批判』の序文にある命題、「たとえ、すべてのわれわれの認識が経験と共に始まるにしても、その認識はすべて経験から出て来るといふわけではない」を真剣に受け止め、それを尊重したものである。それは哲学、あるいは哲学者の認識に当てはまるとフリースは考えた。「哲学はその概念を経験という素材から引き出さなければならない。それがうまくできればできるほど、その概念に徐々に接近し得る。」(第八卷、『形而上学綱要』一八二四年、『形而上学体系』一八二四年、一三五頁)あるいは「われわれは認識を考える日常の単なる客観的な方法を捨てなければならないし、主観的な人間学的方法に制限しなければならない。それ以外の方法は後にあって、おのずから、われわれに与えられる。」(第四卷、『新理性批判ないし人間学的理性批判』第一卷、第二版、一八二八年、一〇三頁)このような、いわば人間学的転回はドイツ哲学の中では、およそ百年後になって哲学的人間学に関心が向くことによりやっとな行われ、更に現代になって科学理論の中でその転回が真剣に考えられるようになったのである。その人間学的転回をフリースは当時の哲学者の唱えた絶対的哲学から離れて実現し、哲学的人間学を押し

進めた。が、彼にとって哲学的人間学は哲学のすべてを意味してはならず、哲学の始めを意味してただけである。ここから「哲学に対するわれわれの提案、すなわち、われわれがすべてのわれわれの認識の真理、適合性についての判断を行う前に、まず、われわれの認識を人間学的に考えようではないか」という提案が出て来るのである。われわれの研究は経験心理学の場に立って始められるが、もちろん、その場を選ぶに際し慎重を期さなければならぬ。そして、われわれはその場にいつまでもとどまっているわけには行かない。」（第四卷、一〇四頁、および次頁）

四、フリースは純粹事実を強調するが、このことは経験主義者の間違った判断だと誤解される。彼はいろいろに関連している純粹事実を語るのである。間違った理論化の危険性に注目させるため、あるいは観念的、形而上学的前提からの研究を防ぐために。しかしながら、そのような事実からのみ認識が作り上げられるというのではない。それどころか認識を構成する主要部分、つまり法則はそのような事実を語ることは獲得されず、獲得されるためには、「慎重に選ばれた発見的方法論的な格律による理性的帰納が必要である。」（第四卷、一〇五頁）が、このことはフリースの考えの一面である。「すべての人間の認識は、普遍的、必然的法則の下では、一部は本性の概念によって、一部は理念によって整えられると言える。法則は純粹に理性的な根源から導びかれるのであり、法則の真理は経験からは引き出せない。これに対して事実の認識は経験にその起源を持ち、認識の真理は必然的法則からは出て来ない。」（第八卷、一六七頁）

フリースは帰納主義者、特にベーコンに経験哲学特有の根本的間違いと述べる。すなわち経験哲学においては、人間はすべての自然法則を帰納によって知り得るのであり、帰納方法は固有の独立した方法であると見なさ

れるが、そうではない。そこで抽象がフリースにとって重要になり、「ライブニッツは既にロックにおける帰納の間違いを強く非難して、普遍的、必然的真理は帰納によってではなく、抽象によって意識される」(第八巻、一六七頁)とフリースは述べるのである。

フリースは登る階段と降りる階段というベーコンの区別に注目して、登る階段という語から「特殊から普遍へと後退する方法を見る。」(第八巻、一八四頁)このことはベーコンを認めているのではない。「ベーコンは帰納をわれわれ自身の多くの思考の単なる分析と区別しない。彼とその学派とは普遍的真理のすべての後退的発見は帰納によってのみできるとする。」(第八巻、一八四頁)経験主義者の帰納に対するフリースの批判は心理主義に立ったものと言うことはできないのである。

五、このことは哲学史書の中に見出されるような誤解を更に産み出すのである。フリースの演繹はカントのそれとも、論理的演繹とも違う。

一、カントの演繹と違うわけは、フリースが自分の演繹概念にカントのそれよりも広い意味を持たせたからである。「……カントの意味での演繹は、諸カテゴリーが経験の可能性の制約一般である客観的な、ただ考え得るだけの結合を……含むので、その諸カテゴリーが必然的に経験に適用されなければならないということを示す。この見解では演繹を理念に代えることは可能ではない。なぜならば理念は経験に関して単なる限界規定を与えるだけであり、経験認識の中で使用され得ないからである。

このことはすべて正当ではあるが、しかし私には不完全であるように思われる。思弁が具そなえる一貫した主観的方面に忠実であるためには、われわれは感覚直観の客観的妥当性をあらかじめ優れていると見るのではなく、すべて

の認識方法を押しなべてわれわれの精神活動であるとして研究するのである。そこで、われわれは数学的原理と哲学的原理、思弁的原理と実践的原理、カテゴリーと理念、演繹を、私の言葉遣いから言えば一様にア・プリアリな原理として受け入れる。従って先述の数学的原理と哲学的原理等々の概念は相互に客観的妥当性を平等に要求しなければならぬ。」(第八卷、一一六頁および次頁)

二、フリースの演繹は論理学的演繹とも同一ではない。なぜならばフリースは証明、直観表現、演繹という三方を理論正当化の基礎(論証論)としているからである。彼によれば、証明はある一つの判断を他の判断によって基礎付けることであり、直観表現はある一つの判断を直観から基礎付けることであり、演繹はある一つの判断を認識する理性の理論から基礎付けることである。(第七卷、『論理学綱要』第三版、一八三七年、『論理学体系』第三版、一八三七年、四七八頁参照)また彼は次のように言う。「すべての哲学は、真であるべきものすべてが証明され得なければならぬ」といふ偏見によって長い間支配されていた。……例えば、私がへどの変化にも原因があるへすべての同時存在は諸実体の相互作用によって規定されているへあるいは私が正、不正、徳、不徳について判断して、真へ先にへどの人間の理性的本性も個人の尊厳から言えば目的自体として取り扱われるべきであるへと言う時、更に私がへ神は存在するへ意見は自由であるへと主張した時、私は私の判断の基礎をどこに置いたらよいのであろうか。私は第一の場合、自然の法則を、第二の場合、自由の法則を、第三の場合、直観に依ら^よない、諸事物の永遠なる秩序の法則を認める。しかし私が判断する際再び意識するこれらの法則こそ直接的認識として私の理性の中に存在しなければならぬ。ただしその理性を意識するためにこそ、私の判断が正に必要なのである。従って、われわれがわれわれの判断を基礎付け得るのは、理性のどんな根源的認識が判断の基礎にあるのかを、われわれが明らかにす

る場合だけである。がこの場合とは、その認識を直接に判断の側へ置くことでも、判断をその認識によって保護することでもない。ある一つの原則の根拠を述べるといふこの仕方がその原則の演繹という意味なのである。」(第四卷、四〇一頁、次頁および四〇五頁、次頁)更にフリースは演繹についてカントと異なっている点を述べている。すなわち「カントが演繹と呼ぶものには私の目的と似たものがあるが、しかし演繹を詳述する手段が全く異なっている。」(第四卷、四〇六頁)

このように見て来ると演繹は理性の理論から導き出されるのであり、心理学からではないことが分かって来る。後者はもちろん心理主義であるが、前者は哲学的な鋭い洞察力が必要であることを示したに過ぎない。フリースの叙述によれば次のようになる。すなわち「どんな根源的認識をわれわれは必ず持たねばならないのか、われわれの理性の中に必ずある根源的認識からどんな原則が生ずるのか、これら二つの問いをわれわれは理性の理論から誘導するということが正に問題である。このことは哲学にとって人間学が重要であることを示している。われわれは哲学の原則(『根本命題』)を基礎付けなくてもその原則を確信しているが、命題は訳もなく(『根本がなければ』)受け入れられてはならない。哲学の原則の中で語られる諸命題が理性の本質からどのようにして生ずるかをわれわれに示してくれる演繹によって、われわれは先の確信をこれに対する非難攻撃から守らなければならぬ。」(第四卷、四〇六頁、次頁)

そこで心理的人間学的研究は哲学的思索の必要条件ではあるが、しかし十分な条件ではないと言えよう。ところでフリースによれば、カントの諸発見は哲学史の終りになってしまふのである。換言すれば、必然的真理を持った体系が示され、その真理の確実で明白な表現が得られるならば、歴史上発展のない静止し固定した知識が存在する

ことになる。このことは哲学的思索にとって十分ではあるが、しかし必要ではないのである。

六、フリースは哲学的演繹の概念によってカントの学説を完成させようとした。それもそのはずカントはコペルニクス的転回を完全には行わなかったからである。「カントは自然科学の形而上学的原則の妥当性と宗教哲学の実践的原則とを証明しようとした。

われわれはカントのやり方を詳しく検討してみると、彼が論理的に処理し示した意味とは全く別のものの方が彼が行うべき証明にふさわしいということがわれわれに分かった。

自然科学の形而上学的原則をカントは経験の可能性の原理から証明したが、しかし、この原理は自然法則の前提としてある存在論的基盤ではなくて、私の理性に要求する心理学的基盤にすぎない。事実、カントの超越論的証明とは、自然の中でどの実体も持続するとか、どの変化にも原因があるとか、同時に存在するものすべては相互作用をするとかということを証明するのではなくて、むしろ、彼の超越論的証明は、もし人間理性が現象を経験全体の中で結合されたものとして判断しようとするならば、人間理性には真理としての法則を前提にする必要があることを示すだけである。この考察全体は心理的人間学的本性によってのみ正しく理解される。……更にカントは人倫的原則から神の存在、意志の自由、靈魂の不滅性を推論するのではなく、逆に、カントは自由の事実が無ければ、また神性、不滅性が無ければ、人倫的理念の妥当性が出て来ないということを示そうとしたのである。神、自由、不滅は実際に人倫的理念の妥当性に対する必然的前提として示される。そうすると、このことは心理学的思考過程にすぎないのである。この過程の中で、われわれは次のことを思い浮かべるのである。すなわち、人間理性は思弁的理念の妥当性をその理性の最初の人倫的確信の中に既に前提している。」(第四卷、四四頁、次頁)従って心理学はここ

では（人間）精神の（欲求の）論理学を意味する。が、その心理学は他のすべてのものをその学自身に還元させてしまうことはしない。また、その論理学は証明を旨とする学ではなく、提示、指摘を指す学であり、カント的に言えば、可能性の主観的制約の論理学である。すなわち「主観的制約から一定の判断が人間理性内で生ずる。この主観的制約の演繹、あるいは提示によって、その判断は証明されるのではなく、むしろ、その判断はわれわれの認識の下に当然あるものとして提示されるだけである。このことによって、われわれはわれわれ自身の思考を擁護する。なぜならば、われわれはどんな方法で擁護すると主張することになるのかという点について合意しているからである。」（第八巻、一一二頁）が、この擁護論を心理主義と名付けるのは全く不合理であろう。これは、ちょうどフィヒテの学説をその中心概念から見てもゴイズムとみなしたり、あるいはマルクスの学説を資本主義とみなすのが不適當であるのと同じである。

七、フリースにとっては哲学的認識を心理学的認識に引き戻すという心理主義のやり方が問題ではない。人間の超越論的能力の理論を経験心理学に還元することが問題なのではない。フリースは彼の最初の論文『経験心理学と形而上学との関係について』（一七九八年）の中で、人間の心情の超越論的能力についての理論としての心理学は「論理学、形而上学としての哲学を……一つの観点から概観し得るものである」（第二巻、『心理的人間学ないし人間精神本性論ハンドブック』第二巻、第二版、一八三九年、『心理的人間学および理性批判論文、一七九八年〜一八〇一年』二九五頁）と述べている。だが経験心理学はそれができない。「経験心理学の認識の仕方は総じて厳密科学という名を冠するには明らかにほど遠い。……反対に形而上学の成果がわれわれのすべての知識の基礎にあるように、経験心理学の場合でも、それが前提にされなければならない。」（第二巻、三三一頁、次頁）更に「心理学の純理論的部分だけでは、不

十分であると言つてよいが、さりとて純理論的部分のない経験的部分だけでは不当であろう。このことに十分に注目しなければならぬ。そこで、われわれは心理学の純理論的部分をおろそかにしていけないし、むしろ、その部分の根本的規定と普遍的概念とを研究全体の基礎に置かねばならない。」(第二巻、三三一頁、次頁)更に「個別的なものだけを語る経験心理学のありふれた断片をわれわれは超越して、われわれの理性の内的生命の理論としての哲学的人間学に高まり得るのであり、そして、その理論からわれわれの認識力の主観的組織が完全に理解されるであろう。それが理解されたならば、その組織から同時に人間精神がどんな哲学を持つのか、あるいは完全に持ち得るのかということが生ずるのであろう。」(第四巻、七頁、次頁)従つて、真の意味での基礎学を求めらるるならば、それは経験心理学ではなく、場合によっては、ヴォルフが合理的心理学とみなしたもののいわば後継者としての哲学的人間学であると言えなくもない。なぜならば還元主義としての心理主義というものは、心理学が還元主義を唱える学として、その明確な地位を持っているところから初めて現れ得るからである。ところが経験心理学はフリースから見るとそういう地位を持っていないのである。フリースの『心理的人間学ハンドブック』はしばしば心理主義の書とみなされるが、心理主義的な突出部分があったにせよ、それは上述のことから見て強調すべきではないであろう。信頼できそうにもない心理学を元にした心理主義があるのだろうか。それはともかくフリースは何よりもまず「暫定的、批判的研究」(第二巻、二五五頁)を要求する。それは哲学ではなく、学の予備学であるとされる限り、どの学に對しても、従つてどのような心理学に對しても妥当するのである。

八、心理主義が数学的論理主義(これは数学的概念、立言(命題)を論理学的概念、立言(命題)から導き出すものである)と同じように、論理学的概念、立言(命題)を心理学的概念、立言(命題)から導き出すものである

ならば、このものはフリースの論理学に対して当てはまると言えなくもない。だが、しかし、それが彼の論理学に適合すると言うのは不当であらう。フリースはそのような心理主義を企ててはいない。彼の論理学は例えばドゥービスラフ、ショルツによって高く評価されたが、この人たちもフリースの論理学をそのような心理主義とは言っていない。が、その論理学には次のことがある。それは、フリースの論理学が、われわれの悟性の本性、本質の学であり、人間学的論理学であるが、それが分析的認識の学としての哲学的論理学の根柢ではなく、むしろ、この哲学的論理学の前段階、予備学であるということである。フリースの人間学的論理学は哲学的論理学の一部として独自の問いを立てる。「概念、思考はどうして人間精神の活動に至るのか、概念、思考は認識作用という他の活動とどのような関係にあるのか、われわれの精神の生き生きした活動を統一するために、どのようにして概念、思考は認識作用という他の活動と合致するのか。……これらの問いから、発見されるものがまだ幾つかあるかも知れない。」(第七卷、三三頁) こうしてフリースは心理主義に反対しているのである。すなわち「いろいろな物事を解明する必然的な根本法則を経験心理学によって、すなわち諸経験によって証明しようとすることが哲学的論理学の原則であると言うならば、このことはもちろん全くばかげたことであると言えよう。」(第七卷、一七三頁) フリースのこの命題がフレーゲの反心理主義キャンペーンよりおよそ四、五十年前に提出されたことに注目すべきである。

フリースの思想は心理主義という概念で完全に与えられるものではない。が、フリースは若い時から精神活動に強い関心を持っていたのである。一七九八年彼が二五歳の時に書いた五つの論文の題名からもそのことが分かる。すなわち『経験心理学と形而上学との関係』『一般的経験心理学の予備学』『合理的心理学』『内的本性の形而上学概論』『心情の経験的認識大要』。しかし、また、これらの題名から彼が心理主義者と言われる危険性もある。とにか

く、これまで述べたところ (一) (八) からフリースを安易に心理主義者と呼べないことは分かる。それでも更に一四まで述べなければならぬ。八の延長線上で数理哲学に触れ、九以降で世界観、哲学的思索 (哲学すること) L・ネルゾンの主張等々を述べたいからである。もっと簡単な理由はゲルトゼツァーが一四まで述べているからである。彼の叙述を筆者の立場で解釈し直し、フリースの思想に現在の「一般的科学理論」から迫り、ここからフリースとヘーゲルとの比較研究を筆者は考えている。両人は思想的に全く相容れない立場であると見なされるが、やはり時代の子であるので、同一の概念をしばしば使用している。また類似した考えも見出される。両人が互いに相手を否定しているにもかかわらず、相手の考えが自分の中へ入り込んでしまっているところから、新しい考えが出て来るのではないかと思っている。

(未完)